EIKŌ NEWS FLASH

発行所
栄光学園新聞部
横須賀市田浦

印刷所
内村ライオン堂
横須賀市・大映前 TEL 356

こよみ

10月7日　第二回体育祭
10月11日　校長誕生日
10月16日―10月26日　交通安全旬間

日章旗の下に　第二回体育祭催さる
秋晴れの十月七日

第二回秋の体育祭は、十月七日（日）教員野球金勝野球グランドにて高等学校中学校共約六百名の参加により秋空にひらめく日章旗の下で、約七時間にわたり行われた。

開会式は九時三十分中学一年生中谷君の開会の辞より始まり、国旗掲揚、君が代の後、「昨年と同じように立派な運動会になる事を期待する」との学園長の挨拶、競技上の注意、日本語校歌合唱の後、演技へと移った。

まず全員の準備体操より始まり、中学生の百米予選、高校生の四〇〇米、中学三年生の百米決勝等、競技は順調に進行していった。

午前の部の人気種目は中学一年生の三つ玉リレー、高校一年生のセンベイ割り、先生方の学科対抗スプーンレース、高校二年生の一五〇〇米競走等でそのうち特に人気のあったものは、センベイ割り、学科対抗スプーンレースであった。

センベイ割りには、顔にセンベイを結びつけ、手に手に新聞紙の木刀をもった、紅白の若武者達が入場、そこで大格斗がくりひろげられたが、結局二一対二〇で白組の勝ちとなった。

学科対抗スプーンレースは満場大歓声の中に、エーンやウラベ先生（渡辺先生）、森が平常の威力を示さんとばかり張切って出場し猛烈に奮斗したが、結局一位社会科、二位英語科、三位社会倫理で、先生方のあらそい事もこれでけりがついた。……

得点は午前の部中間頃五十一点もひき離されていた白組はその後だんだん赤組きて中学三年生のメガフォンキックは特に人気のあった点に於ては他に及ばない。

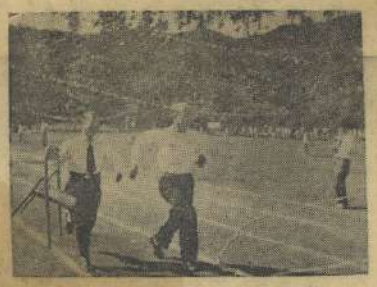
この頃赤組では浅野先生、白組ではウルフ先生の指揮によって応援陣は華やかになり、ウルフ先生はどこかでトダンを拾って来てたたき、赤ではローラーをひき出してくるしまってあった。

次は体操部員の体操、マットワーク、熊野先生のお得意の脱立前方転過、空中転過、タルマッチ、側転バック等があった。

中学生の一〇〇米四〇〇米八〇〇米決勝、障害物等の次に放火竟走ならぬ火つけ竟走が素晴父兄先生方によって行われた。これは口にタバコをくわえ、カトリ線香から火をうつすもので、これには来賓としてこられた。

DAVISの中佐も参加せられた。この後昔ながらしのぶ東海道五十三次の一場面父兄生徒の親子電車各部対抗リレー高校生の五〇〇米リレー等で競技は終了し、プロムネード、整理体操をへて閉会式へと移った。総得点は赤組百十九点、白組百四点で勝利は十五点の差で赤のものとなった。

成績発表



賞品授与にひきつづき校長先生は運動会の講評として「今朝私は運動を立派にやってくれる様に云った。その通りに大変よくやったと思う。去年よりは今年、今年よりは来年という様に年毎に立派なものにしていってもらいたい」とこの運動会の成功を認めて下さった。次に高等学校二年生の「　」君の閉会の辞をもって秋のアルバムを飾る楽しき運動会の一日を終えた。

中学一年　四〇〇米
① [redacted] ② [redacted]（赤）
③ [redacted]（白）

中学二年　八〇〇米
① [redacted]（白）② [redacted]（白）③ [redacted]（白）

中学三年　八〇〇米
① [redacted]（赤）② [redacted]（赤）③ [redacted]（赤）

高等一年　一五〇〇米
① [redacted]（白）② [redacted]（赤）③ [redacted]（赤）

高等二年　一五〇〇米
① [redacted]（赤）② [redacted]（赤）③ [redacted]（白）

高等一・二年　五〇〇米
① [redacted]（赤）

『図書部を巡って』にかえて

当眞　嗣康

▼至聖武断飲流、東湧西没、逆瀉縦横、鯨奮自在と。嘲的に事物の本質に把着する達人には概念語もてする陳列は無用。心眼を妙用せば分析ぬきで真如を冷視自知しうる。苦禅は弟子臨済にいい(1)やりと一掌せられて、遠風顧漫部、未法悪将虎髭と悦んだ。論理を石ころのように積み重ねれば物のわからぬ尺取虫には通用しないだろうが、こんな智力もあるのだから眞理の世界は玄妙だ。だがこれはギリシャに発する哲学的方法とは両極端に位する思惟態度。

▼サラセンからの代数学と現実的階調いみじきギリシャの幾何学との、一個の頭脳に融解したのが、デカルトの幾何学である。新方法の樹立はあまたの新知識を東広がりに開拓する。デカルトなる達人思惟するのがギリシャ的態度である。

▼ダマスコ街頭で光にうたおされたサウロは、天よりの声を聴いた。「汝ある義にさからうあたはずしと。主に従う者をとらえては牢にたゝきこめていたサウロが、雷光一閃たちまちキリストに仕える無二の使徒パウロに豹変した。天啓は知識を超越する。聖霊は意志を意表にはたらかす。助力は凡人をも超人に化する。超自然界には摩訶不思議な現象が相来する。人間は神のみてわざの前にはひざまずくばかり。天啓にあわば理性の利及はこれを翔におさめねばならない。ヘブライに培われた信仰の流れはロマなる大潮水にいり、実に中世を経て人類の証程を一変せしめた。自然的理性では夢想だにしえない神像が、人間の霊魂に啓示もて貫通している。

天啓はギリシャ哲学と結びついて神学を形成し、ローマ帝国の死灰の中に故会なる超自然的組織をうちたてた。隠遁の「行」も信仰を身に体する修徳者も派生する。アウグスティヌスの思索、ベネディクトの瞑想、フランシスコの純貧、トオマスの知識体系、それらの根底には天啓がひそまっている。

▼西門之下、有拳有書
載弾載詠、憂得我意、と詠じた昔の朔明のこころねには老荘さみのかすわけにいかぬ。梁林人不知明月来相照、と吟ずる王摩詰の詩境には仏法と淵明とが隠れている。山都赤人をとらわりびきしても淵明や摩詰の大悟底は見いだせない。まして清少納言におや。天地與我一体、萬物與我同根とあるが、形而上的悟道と自然愛とを調和せる芸術家に、晩唐では寒山、寒山もて信仰を身に体する修徳者も派生する。アウグスティヌスの思索、ベネディクトの瞑想、フランシスコの純貧、トオマスの知識体系、それらの根底には天啓がひそまっている。

▼ヘブライにおける神の天啓、ギリシャに発する理性の自律的活動、インドに魂をおく魂如への瞑想、シナに胤をひく自然への悟入、精神活動のくさぐさな形態は、人類史になりいでたおびゝゝな遺産である。政治や経済的に一体化せる地球世界は、精神活動自体においてもひとつ基盤に立たねばならないが、思惟方法において東と西とには大きな差異が存する。オリエンタリズムやヘレニズムやヘブライズムがローマに流入した。

純シナ的潮流と西域文化とが翻訳、随唐においてて調和せられた。

ローマと中世ヨオロッパ、また随唐においてなされた、精神の綜合的調和が、未来の世界に樹立せられるべきではなかろうか。

これは人類に課せられた宿題であろう。

（社会科教諭）

校長先生、御誕生日を迎えらる

校長先生は、十月十一日（木）満三十九回の御誕生日をお迎えになったこの日朝礼で、高二A蒲原秀治君が祝詞を述べ、その後、先生は大要次のように話された。

「諸君どうも有難う。今朝私はAFRSの放送を聴きましたが、偶然始めに"Good Morning, Grandpa! おじいさんお早う!"という言葉がとび出したので、びっくりすると同時に、心配になって、鏡を出して自分の顔や髪の毛をつくづく眺めました。二、三日前に、ドイツの父から来た手紙にも、髪の毛の事が書いてありましたが、とにかく御覧の通りです。

私は今日まで、この学校の為、又諸君の為に毎日全力を傾して働いてきました。先生方も皆よく協力して下さり、又君達もよくやってくれました。しかし、これから先のことを考えると、この学校がよくなるか、悪くなるかは、全く生徒の気持によるのです。どんなに私や先生方が頑張っても君達がしっかりしてくれなければ駄目です。勿論これからも、私は今までのようにこの一生懸命にやるつもりですが、私の誕生日に当って君達もこの思いを新たにし、將来のためにしっかりやろうという決心をしていて下さいと。

次に先生より例年のDirtiest Girl が全校生、一校時四十五分後に行なわれ、五校時で終了という形で与えられ、この日の授業は、十二時五十分に終った。

遠足の予定

毎年、春と秋二回行われる遠足は、十月三十一日に、中学一、二、三年の遠足が行われることになった。

三年生のコースは、横須賀→東京→鎌倉→相模湖→小佛峠→高尾山→浅川→東京→横須賀、である。

二年生のコースは、春三年生がいった三津海岸の逆コースが少し変ったもの。

横須賀→大船→沼津→立の浦（バス）→三津→水族館→三津→長岡→（反射炉）→伊豆長岡駅へ駿津鉄道→三島→大船→横須賀

一年は何時もと同じ箱根で、コースは、

横須賀→大船→小田原→箱根→早雲山→大涌谷→湯尻→元箱根→小涌谷→小涌谷駅→小田原→大船→横須賀

高一・高二は、勉強と経済的な関係で、楽しい遠足は今度はないそうである。

渡船の行方

一学期末に二回渡船試運転された渡船は、二学期を一月半過ぎるもいまだに実行されないので、夏休み以来の経過を探ってみた。

試運転に使用された船のエンジンは五、六十人乗用としては小器で、船自体も渡船用として検査庁の検査に通るかどうか気づかわれるほどであった。その上船の発着場の問題もうまく運ばなかったため、その後の幾度とない本校の問合せにも全く返答なく、ついにそれら一切のことはうやむやに葬られてしまったのである。

中三年、最高裁を見学

十月十九日(金)中学三年生約百五十名は、国立博物館に日本古代文化展を見学し、又社会科学書の氣東京地裁の裁判を傍聴した。博物館では思いがけなくも、天皇、皇后両陛下の行幸があり、最高裁判所を見学した時には田中耕太郎長官のお話を伺かい、一同、朝には想像だにしなかった事が矢次早に起ったのに少々驚きながら、四時頃新橋を発って帰途についたのである。

朝、横須賀六時十四分発という恐ろしく早い電車で行ったが、乗遅れた者など一人もなく、一部の生徒が上野で降り損なって次の駅までつれていかれたのを例の漫歩に、八時には一同元気な顔を上野公園に揃えたッ。参加の先生方は、当真、森本・水尾・東郷・江口・白水の六先生である。

博物館の開館迄一時間程、森本先生に引率されて、不忍池・東大構内を散歩して後、第一の目標だる国立博物館前に集合丁度その折行幸された車中の陛下に、一同整列して礼——。

門内に入って、先ず第一に左手の表慶館内をぐりして後、日本古代文化展の催されている本館に入った。十室の多きに分けて納められている縄文、弥生、古墳の三古代文化期の遺物——石器、土器、骨角器、曲玉埴輪等——のおびたゞしい陳列に、九時半から十一時丸、一時間半も、実に短かく感ぜられた。時間が足りないので、二階の陽明文庫や、文楽人形を見る事の出来ないのは残念だったが、古代文化展だけでも、皆ずい分多くの知識を得た事であろう。

十五分間で昼食を片付け、すぐに博物館を出て、日比谷へと急行した。騒々しい交叉点を通って、日比谷公園の角を横へ折れ、東京地裁の中庭を素通りして、煉レンガ作りの最高裁判所の前に立った。二年の津田君の父兄の御案内で、一昨年完成したという最高裁の内部を見学し、その後に、十五の裁判官がズラリと並んでいる大法廷に入って人事局長さんから、司法の性質や、裁判官などについて色々とお話があり今度は別の部屋で、田中最高裁長官のお話を伺って、最高裁判所を辞した。

再び先刻の道をバックして、繁華した東京地裁に寄って、組別に各々別の法廷で裁判を傍聞して、裁判の具体的なやり方等を大体呑込んだ一同は、中庭に集合して一同を案内して下さった津田さんにお礼を云って後、地方裁判所の門を出た。

途中、日比谷公園で一休みして元気を回復し、有楽町から車上の人となった。

「百聞は一見に如かずし今迄、授業によって実際の裁判を頭に描き、土器模等によってわずかにその形を推量するに止っていた一同は、今や傍聞によって具体的に裁判の内容を知り、実際の土器を見て、眞の古代文化に触れて、みな、今日一日で大変知識の豊かになったような感じで、汽車にゆられた。

☆　☆　☆

旧図書部の回想

図書室新発足に当って

図書室新発足にあたって旧図書部員としての経験から感じたことを述べてみたいと思う。今後の図書室の運営にあたって皆さんの協力の参考ともなれば幸いと思う。

四日間の貸出期間が済んで本が返って来る。A君のさし出した本を見て嬉しくなった。前からその白がかった表紙の汚れる事をおそれて、何とかしなければと思っていたのだが、なかく少い人数では十分な眼に恵まれずに果さないでいたとこる。A君は今日大変なハトロン紙でちゃんとカバーをして返してくれたのである。おまけに背には整できれいに書名も図書番号も記されている——。こんな事が数例あったがその時の係としての気持は何とも云えない。だがこんな事は余りない。本の背や角が大きく破れかゝっているのをそのまゝ、むしろ前よりひどくして返ってくる時は、思わずその人の顔を見たくなる。破本として修理するため別に納められたものなど始終に気のつく人がちょっとならなかっただろうが、どん部員ではそのような協力がつゞく欲しいと思われた。返済日に返して来ない人なんかましてどんな気でいるのだろう。罰金は二円だが勿論やむを得ない方法として徴収しているので、こんな制度は早くなくすることが出来たらと思う。一人の不心得な人の為に何人かの部員が何度か足を運び、何分かをついやす。

書棚から本をとり出すときの扱い方も本の破損に大分影響する。今頃の本の安っぽい製本ではこの事は特に大切だ。

また二〇〇の番号の本がとんでもない九〇〇の文学の所にとんでいるなどこれも一驚きの原因となった。所詮は縁の下の何とかで、苦労はいとわないといっても、全体の発展の上からもっとどうにかならないかと思った。

辞書や雑誌の位置にしても同じである。

次に図書室内の態度について——横須賀の図書館には生徒の為の特別室が設けられていて、方々の学校の生徒が来て勉強している。その室の中ての物音と今までの騒音室での騒音と較べて考えた時、ちょっと恥かしくなった。図書館で守るべきれ礼作法はいろくあるが、その一番大切なのは静粛と秩序ということである。勿論、これは部員にも責任があった。部員が大きい声をたてればそれでおしまいである。

又放課後用室と同時に多数の生徒が殺到して混雑をきわめたが、それでも皆沉黙を守り、秩序ある行動をとったら混雑も相当やわらぐに違いない。それから案外考えなしにやっているのだろうが、掲示ポスターのピンを外したり、黒板に落書きをしたりしているのも感心しない。その他、鉛筆のけずりかす、紙屑のやり場、窓のあけっぱなし、椅子のやりっぱなし、ひどいのは鞄のかゞっている雑誌等の戸棚を無理してあけてあった事もあった。

ずい分不平ばかりになったけれど、とに角、自分のやる事がどんな影響を与えるかを考えて皆が協力すれば、図書室はすっと皆にとって楽しい感じの良い勉強場所となるだろう。

あとになってしまったが、今まで係として色々たらない点も沢山あったと思う。そのようなものについてはこゝで深くお詫びしたい。

最後に、これまでに発展して来た図書室が学校の直営機関として更に多くの生徒に利用されるものとなり、全生徒の積極的な協力によって益々発展せむ事を願い、又今までとかく低調であった文芸方面の活動が近く生まれるべき文芸部によって活発に行われむ事を期待して終りとする。

各部近況

生物部 本格的軌道に乗る

▼生物部

「生物部の設備——室内実験器具、薬品、特に色素等——は高等学校のものとしても上々ですゞ」と浅野先生は自信を持って言われる。なるほど氣熱滅菌器、恒温器、ミクロトーム、と云った大型の器械も見え、シャーレー、試験管等も以前よりずっと多く備えられているようだし、昆虫の標本も新着の標本箱迄にされいに整頓された。今学期からは、生物準備室の三分の一位が仕切られて部員の研究室となり、中三部員の個人々々の席が設けられ、部員は自分の席で自由に研究出来るようになった。もう近頃はすっかり研究室らしい空気が漂っている。

去る九月十六日には、三浦半島方面へ深色体研究用の海浜植物採集が行われ又、十月廿日には、年一回の縊が開かれた。

「中三の部員が中心になって努力して、まあ、やっと本格的軌道に乗ったというところですゞ」と、浅野先生もお喜びであった。

▼体操部

今度の運動会は一番楽しみに待っていた部は勿論この体操部であろう。毎日授業の終ると同時に体育館へとんで行き、早速練習を始めるという意気込みだった。当日発表されたものは、今までのように組立てを一つもやらず、そのかわり熊野先生の指導の徒手体操をへて、熊野先生の、妙技——側転バック——に終った。最初の徒手体操は、上級生部員十名によるものでタンバリンの音に合わせて行われる体操は、全員良く一致して見事であった。次にマットワーク前転、後転、うさぎとびを一年生部員が、ついで二年生以上の部員による前転開脚、後転開脚、とび上り前転、更に進んでほんてんとうりつ、前方回転の時は、一人ごとに盛んな拍手が起った。タルマッチは、この前の学芸会では、いすが用いられたが、今度は一人がひとさを立てゝ、仰向けに腰で上で逆立ちをする人を支えてやる帆掛船の型式が用いられた。最後に行われた熊野先生の側転バックは非常に技術を要するが、先生は軽々とやってのけ、満場の拍手をあびた。全ての発表が終って席へ帰る時、あちこちから部員の名前を呼ぶ声、賞賛の声が聞えた。

▼硬式庭球部

本校硬式庭球部初の対外練習試合が十九日(金)午后四時から鎌倉の稲浜国大附屋中テニスコートで行われた。第一回戦、附屋中三年対本校一年(6〜6)は6〜6で引分け、第二回戦、附屋中三五(　)対本校高二(　)は6〜3で勝った。その後附屋中コーチ志村さんと本校部長山本先生対組が行われ、6〜6で引分けとなった。

▼化学部

化学部は今月の始めに、KIA横辺部長以下高等学生八名によって結成され、十月十三日第一回の集りを行った。理論の方は小山先生が担当され、部としては主に実験を多くやって行く方針である。

▼野球部

本校野球部は来る十一月三日上智グランドにて対暁星秋の定期戦を交えた。

病友を訪ねて (1)

▼　君(中2A)

去る七月二十六日胸部手術の為に東大病院に入院した　君を見舞は出来なかったが、横浜の　君の家を訪問した。

八月八日右肺を手術し骨四本を取り、九月始め退院できる予定であったが、切口が化膿したゝめに再び今度は背中を手術し膿は出なくなったが、熱が九度六分〔〕七分まで上り、それがつゞいていたが、やっと下ったとのこと。今は座って御飯を食べられるようになったが、まずくて薬と思って食べているという。又歩く事を許されたが長い事寝ていた為に足がふらくするそうだ。

十月中に退院できるそうだが、なお二ケ年くらいは家庭療養をせねばならない。頭も優秀であるのに勉強が皆より遅れるのはさぞかしつらい事であろう。

入院中は読書をしたり模型機関車が大好きなので、電気結関車の設計をしたりしている。五、六年したら再び野球をしたいとの希望、最後に、貴君にはお母さんがつきっきりで、お姉さんは一日置くらいに行っているので、まずホームシックはないようである。(中3B)

図書室新発足

学校図書館は学校の学習活動の土台ともなるべき機関であり、且市民としての教養を高める場所でもある。それ故全生徒がこれに関心を持たねばならないのは当然であり又その運営には、優れた技能と熱意を要するものである。

本校に於いて従来図書文芸部の一事業として部員の責任によっていたこの図書館の運営は、尚合理的完全を望む為に、該部の活動から切り離し、学校直営の機関としての位置をはっきりさせ、当面の問題出来る。雑誌統数は約百冊で十一月からは毎月出貸出も行なうという。

科学閲覧室

科学雑誌は読みたいがとても一々買きれないという人達の為に、此度現科校舎に雑誌閲覧室が南かれた。同室には色々に科学雑誌を取揃えてあり、誰でも四・四五時迄自由に閲覧出来る。雑誌統数は約百冊で十一月からは毎月一度まわって来る予定。

因みに従来の図書文芸部で行っていた図書貸出以外の活動は、あるものは新たに編成される図書係にひきつがれ、他は近い将来発足すると思われる文芸部の活動の一つとなる。

尚、六月末に行われた洋古書バザーの収益を以って今回多数図書が購入せられた。

生徒作品募集

新聞部

▼募集要項は次の通りであります。

係では皆様の応募をお待ちしております。

▼募集期間——十月末日迄、但し遠足の写真に限り十一月十日迄延期。

▼題——作文は自由。写真は「秋の風景」「動物」「学校行事」。

▼大きさ——作文は四〇〇字詰原稿用紙二枚以内、写真は大きさ自由、枚数制限なし、但しカメラの名前を明記の事。

▼応募先——投書箱

▼賞——校長賞(作文、写真の中より各二名、特選(作文、写真)各一名、入選(作文)各三名、写真一名、入選(作文)各三名、写真一名の各々のものに賞品がおくられる。

卓・小山先生(全般)、堀先生(高校図書室)、白水・入見先生(中学図書室)の御指導により、生徒側よりは、その事大性からみて特に選抜指名されたもの(中学・高校各二十五名以上)を以って図書係を編成し、その実際上の運営に当る他、中三以上全生徒は、交替して毎日の当番としての義務と权利をもつ事になる。この当番は各人約二ケ月に一度まわって来る予定。